

古本屋の戦後

復帰以降の古書

業界と緑林堂書店

武石 和実

沖縄における古書店の歴史がいつから始まるのか定かではない。戦前にもあった様だがはっきりとした資料はない。古本屋どころか書籍の流通の全体がもうひとつよくわからないのである。

本土復帰以前の沖縄は、書籍の流通は政治的経済的な制限を受け、人々は皆、書物に飢えていた様である。価格も割増加算され、市場に流れている本の絶対量そのものが少ないわけだから、古本屋が商売として成立すべくもなく、幾つかの店ができはしたが皆短命であつたという。古本屋がひとつの業界として安定して成立していくのは、復帰後の政治的経済的混乱がひとまずおさまった80年代に入ってからである。

私が沖縄の住人となつたのは復帰の年の事である。この頃、

国際通りの牧志バス停前に高良書店という、新刊書から文具、そして一部に古本を置いている店があつた。この時期の沖縄は政治的激動期で、高良書店は左翼関係の各種の新聞やらパンフレットやらを置いている店として、その筋では全国的に名前を知られていた店であつた。私自身よく出入りした方なのだが、古本の方は大学の教科書やら雑本類のみで、何かを買ったという記憶はほとんどない。それでも地元の人達にとつては結構重宝なものであつた様である。

琉球書院が店を開いたのもこの頃であるがその中心は新刊の郷土図書で、古本屋というには少し離れた存在であつた。

沖縄の今日の古本屋の隆盛(？約60店舗)につながるのは、一九七三年頃から始まる根元書房・佐藤善五郎氏による「古本市」の活動である。氏は東京から大量の本を取り寄せ、貸ホールや街頭あるいはデパートで展示即売会を開いていったのである。これは本に飢えていた沖縄の人々に大きな反響を呼び、会場はいつも満杯で、聞く所によ

ると「本」と名のつくものは何でも飛ぶ様に売れたとの事である。私自身その客の一人であつた。

これに刺激されて、労組や市民団体が主催しての古書の展示即売会が、運動資金稼ぎの一環として開かれる様になった。「吉岡カメラン裁判」「松永裁判」の支援の為に全国から無償で集められた本が、相場からいうとべらぼうに安い値段で販売されたのである。私の友人はここで三島由紀夫の「花ざかりの森」の初版美本をわずか三百円で購入している。私はこれらの即売会にボランティアの販売要員として関わりを持ったが、今にして思えばこれが今日の私の仕事への最初の関わりであつたといえよう。

古書即売会の盛況は商売として古本屋をやってみたいという人々を生み出していく事となつた。一九七三年から七五年頃にかけて石原誠氏(現北海道・サッポロ堂)の遊古堂ができ、首里の琉大裏には当時まだ学生だった野国昌健氏(現南星堂)が学友古書を店開きした。又牧志公設市場の中には南島書院(現西原書店)が、安里十路路には安里古本センター(現・国書房)が、それぞれ佐藤氏からの本の

仕入を元に開店したのもこの頃である。この時期は店舗数も少なく、商売としての目新しさもあつて、売買ともに結構面白味があつたという。

一九八〇年代から八二年にかけてはロマン書房、現代書院、創流書院(現南星堂)、緑林堂書店が次々と宜野湾市の琉球大学・沖縄国際大学周辺に店を開き、それまでの那覇の古書店とあわせ、今日の沖縄古書業界の骨格が形成されたのである。

私は元々は古本屋の客の方であつた。県内の即売会は勿論、都合で上京したりした際は必ず神田で一日をつぶしていたのである。そもそも沖縄に移りすむ前、東京周辺に住んでいた頃にはせどり屋の真似事をした事もあつたし、給料の大半は本に消えていく様な生活を送っていたのである。

その様な中で、古本屋をやるという話が出たのは一九八〇年頃だったろうと思う。当時私はつぶれかけた印刷屋を再建して引きつこうとしてうまくいかず、閑散とした事務所が無償の時を過ごしていたのだが、以前の仕事での私の後継であつた新垣裕之氏(現書肆あらかき)が遊びに来て、その雑談の中で「古本屋でもやろうか」と言った所、

彼が「古本屋だったら協力するよ」というので意気投合し、ほぼ一年近い準備を経て、旗上げをしたのが一九八一年一月であつた。

私のわずかな自己資金(確か二、三〇万程度)と友人からの借入金、そして新垣氏の出資金をもとに、那覇市小祿の宇栄原団地公設市場内に店を構えたのである。店坪約五坪、家賃はわずか三五〇〇円であつたが、客の数や売上げも家賃相応であつた。

私は元々社会科学系中心で考えていたのだが、大学で琉球史を専攻してきていた新垣氏の提案で和本をも含む郷土史誌を扱おうという事になり、開業する三、四ヶ月前には、店の大看板とばかりに、神田の老舗から「中山伝信録」の明和三年版を入手するなどして、開店当初より人文系と郷土図書の専門店を旗印としたのであるが、これは今日に至るも基本的に変わっていない。もっとも社会科学系の本はあまりの売上げの悪さに徐々に棚を追われていつていくが……。

一九七〇年代末頃から県内では組合結成の動きが高まり、我々の店開きと組合結成はほとんど同時であつた。組合の最初

の事業は一九八一年春の三越での展示即売会であった。この三越での即売会はその後の緑林堂書店の営業展開にとって大きな跳躍台となった。というのは、当時最も店坪の小さな、そして開店したての我々が、即売会の全売上の四割を占める売上を記録したのである。そしてその中心はあの清水の舞台から飛びおりの気持で購入した「中山伝信録」であった。仕入値七〇万、売値が九五万、デパートや組合の手数料をひくと利益はわずかに二〜三万であったが、いいもの、珍しいものであれば多少高値であろうとも売れるのだという事を深く認識したのである。これは自信にもつながったし、又、優良のお客様を顧客としていく事にもなったのである。

客の委託品である夢二の版画軸(三越で売れなかったのだ)を出品するとともに、分野もへったくれもなく、とりあえず片っ端から札を入れていった。店には在庫が何にもなくなつていたのである。発声が始まるとめつぼうやたらに「緑林堂」の声が上がった。そばで同業者が「緑林堂で何だ? いやに高く買つてやがるなあ」とささやきあつてゐる。こちらはもうカッカとして穴に入りたい気分であった。ある若手の同業者がみかねて「もつと値段をおさえた方がいいよ」と忠告してくれたのを覚えてゐる。

結局黒つぶて見映えのするものや、岩波・みすず等の本を随分高くたくさん買い、沖繩に持ち帰った。夢二は二万で八勝堂さんに買って頂いた。又、市場で声をかけて頂いた文学堂さんからは琉球人の書軸を手に入れた。更に、神田の店を片っ端から回り、戦前のものを中心に郷土誌関係の古いものを総ざらいした。この最初の東京での仕入も又、その後の店の方向性を決める一つの要素となつてゐる。

沖繩に帰った時は文字通りのスッカランであった。郷土史誌を中心に図書館や資料館への持ち込みの営業活動をする、とりわけ古い郷土史誌類はあつたという間に売れていった。公共機関への古本屋の営業活動というのも、沖繩ではおそらく私が最初であつたろうと思う。もつとも店頭では全く売上がなかったから、その活路を求めて外へと出ていったのであるが……。

緑林堂古書目録第一号を発行したのは一九八二年七月の事である。B5判でタイプオフの二六頁、掲載点数千二百点であった。これは沖繩では初の古書目録であつた。今からみると高いのもあればバカ安もありの、あぶなっかしい目録であつたが、とりわけ戦前の郷土関係はすぐに売れていった。全体としてみると、製作費や送料も含めて考えるとあまり利益の良いものではなかつたが、先の三越展での成果とあいまって、古い郷土図書を扱っている店という印象を世間に広めていく上では大きなものであつた。この数年は目録発行もとだえているがそろそろ再開せねばと思つてゐる。

目録を発行して間もなくの事だから、恐らく九月頃だと思ふが、店を現在地の宜野湾市長田に移した。周囲には大学が二つもあるし社会科学系の本も売れるのではないかと思つたのである。

そうこうしている内に一九八三年頃になるとロマン書房によるチェーン店の展開と派手な宣伝が始まった。これは古本屋開業予備軍を堀り起す事となり、同業者が二年ほどで一挙に五〇店を超えるまでになったのである。同業者がふえると当然利害関係の対立も激しくなり、この頃から一九八六年頃までは、組合内部、あるいは組合対非組合の様々なトラブルも発生し業界としては困難な時期であつた。

結局この時期を乗り切つた業者が、今日の沖繩古書業界を支えているといえよう。

一九八七年に遅い結婚をしたのを機に、当時那覇店(一九八五年開店)をみていた盟友の新垣氏と経営を分離する事になった。従つて一九八八年以後は同じく緑林堂の那覇店・宜野湾店を名乗つてはいたが、経営上は全く別となつた。緑林堂那覇店はその後屋号を書肆あらかきに変え、現在西原町に店を構えている。

新垣氏には随分世話になつた。開店当初の金策は彼の力に

広重拾遺

葉書版オリジナルカラープリント
七葉 解説リーフレット付
未確認の東海道五十三図会・神名川(藤慶)、今やう倭文庫、稀少とされる新板江戸名所・御殿山之景(短冊)、新撰江戸名所・不忍池新玉堤春之景など。
頒価 二千元(送料サービス)

〒980仙台市青葉区角五郎1-5-38

武田鉄太郎

振替 02260-0-8341

(沖繩宜野湾市・緑林堂書店)